

平成30年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
 (次期学習指導要領に向けた実践研究)
 成果報告書 (概要)

受託団体名
埼玉県

1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
埼玉県	特別支援	病弱	埼玉県立けやき特別支援学校

2. 事業の実績

(1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成30年 4月	全体研究会 (研究概要説明)	○計画通り実施・終了
5月	ICT研修① (東洋大学 滝川教授) (5/25) * 双方向通信技術を活用した分校との会議	○計画通り実施・終了 双方向通信技術を活用した会議は初めての試みであったが、活用への展望をもつことができた。
6月	ICT研修② (東洋大学 滝川教授) (6/29)	○計画通り実施・終了
7月	ICT活用 (VR体験) に関する研修 (日本工業大学 山地教授、他助手3名) (7/24)	○年度途中で追加・実施職員に体験し、今後の授業への活用への見通しを持たせることができた。
9月	ICT研修③ (東洋大学 滝川教授) (9/14)	○計画通り実施・終了
11月	ICT研修④ (東洋大学 滝川教授) (11/2)	各研究単位での会議を定期的に設定することで、研究推進することができた
	別途、 年10回 授業改善に向けた研究グループ	
平成31年 1月	小学部 外国語活動・外国語教育研修会 (講師 宮下貴美子 氏) (1/28)	○計画通り実施・終了
2月	ICT研修⑤ (東洋大学 滝川教授) (2/1) ICT研修⑥ (東洋大学 滝川教授) (2/25) ※研究報告会	○計画通り実施・終了 研究報告会では、大学教授、県教委より指導者をお招きして、指導助言を頂いた。
3月	今年度の総括および次年度の概要	○計画通り実施・終了

(2) 研究課題

病弱教育における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりに関する実践研究をテーマに、『主体的な学び・対話的な学び・深い学び』これら『3つの学び』の実現に向け、ICTの活用を図ると共に、効果的な指導内容・方法について研究する。

(3) 研究の概要

病弱教育における主体的・対話的で深い学びの実現に向け、下記の2つの柱を中心に実践研究に取り組んだ。

I 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善

主体的・対話的で深い学びに焦点を当て、これまで取り組んできた授業実践との関連や課題を整理し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の方向性を明らかにしていく。

小学部では、学習指導要領の改訂のポイントである、『外国語（活動含む）』と『特別の教科道徳』に、中学部では、特別支援学校の特徴的な授業である『自立活動』に焦点を当て、3つの学びの視点から授業を見直した。

II 主体的・対話的で深い学びの授業づくりのためのICTの活用

ワーキンググループ（以下WGと省略）を設定し、各WGで活動（事例報告等）を行った。授業改善の方向性と併せ、次のテーマを中心に病弱教育におけるICTを活用した指導内容・方法の実践に取り組み、主体的・対話的で深い学びの授業づくりに取り組んだ。

①障害特性に応じたICT機器の有効活用

デジタル教科書やタブレット端末等の実践例を蓄積し、障害特性に応じてICT機器を有効活用した指導方法や指導内容を検証

②双方向通信による学習

双方向通信技術を活用し前籍校での教育活動への一部参加や行事不参加時の校内やベッド上での間接体験の実践

③VR等、仮想現実、疑似による体験学習

VR等の新たな技術を使った機器を活用し、仮想体験や疑似体験による学習への参加を実践

(4) 研究の成果

I 授業改善について

①指導内容の精選や連続性、授業時間の工夫など、短時間でも重点や繰り返しを意識した指導の必要性を感じた。

②道徳は、自身が悩み、考えを深めることが大切であること。子どもの思考の多様性を認め、『対話的な学び』について『自分自身や目の前の物・事象との向き合い』という観点で取り組めた。

③3つの学びに焦点を当てて、検討する中で『話し合いだけではなく教えあい等の学びあう姿が見られた』など、今までとは違う視点で評価できた。

II ICT活用について

(1)障害特性に応じたICT機器の有効活用

タブレットを使用することで、学習機会の確保や活動の充実を図ることができた。

(2)双方向通信による学習

①日常生活学習、算数、生活、図画工作、音楽、特別活動（学部集会、校外学習）、生活単元学習、総合的な学習の時間など、多岐にわたる学習で活用できた。

②本校一分校の教員研修での試行から開始し、学校一棟間、県内特別支援学校間、県外特別支援学校間、モバイルルータを使用しての校外学習での取組、また一時他院にて治療していた児童についても、他院一校間での授業参加と様々な環境下で活用できた。

③使用したテレビ会議システムの簡便性が支持され、多くの教員が使用し、活用場面を考えることで、より幅広い実践が生まれるという、良い循環が生じた。

④「～同時双方向型授業配信を行った場合の～出席の取扱い等について（通知）」【30文科初第837号】が出されたが、②で挙げた他院―本校の実践は、本通知にも該当した。他院で本人と保護者、本校で教員が対応し、授業を行った。小学部3年生の児童が自ら接続し、実施できた。

(3) VR等～による体験学習

教科書に準拠した内容が少ないという現状はあるが、理科（天文分野）などで活用の可能性を感じられた。技術面で難しい面が多々あり、大学や企業と連携することで、職員研修や特別活動として児童が体験する機会を設定できた。

(5) 課題と今後の方策

I 『3つの学び』としての課題

(1) 小学部として

『3つの学び』の視点を児童個々の実態に沿って、深める実践をしていきたい。授業実践研修や事例研究を行い、3つの学びについて実践を基に協議、評価する取組を行っていきたい。

(2) 中学部として

今年度、取り組んだ方法で、技能教科と総合的な学習の時間について検討を重ねていく。各教科で『3つの学び』を検討し、実践例やキーワードを挙げていきたい。実践を積み重ねながら『3つの学び』について、理解を深めていきたい。

II ICTの活用に関する課題

ICTの活用としては、以下の3つの柱で取り組んでいくことを考えている。

①今ある機器の有効活用

デジタル教科書、IWB（インタラクティブホワイトボード）、タブレット等既存のものを有効活用

②双方向通信技術の活用

テレビ会議システムの更なる活用（相手方の広がり、他システム利用）、テレプレゼンスロボットの活用

③VR等新しい技術の活用

外部との連携、既存のデータ（360°カメラの画像）等を実践で活用

III 今後の展望

今年度の成果や課題を基に、改善を図っていく。当初の計画である『主体的、対話的で、深い学び』の視点からの授業改善というテーマに沿って取り組み、『3つの学び』について、どのように捉え、どのような教育活動を展開していくのか、また今後、展開していくことが重要なのか、について検討していく。併せて、『3つの学び』をより効果的にするために、よりICTを活用していきたい。

『3つの学び』の視点から授業改善を行うことで、病弱教育における『新しい時代を生きる子どもに必要な力』を高め、今、病気と闘っている子どもたちの将来の一助となるよう研鑽に励んでいきたい。